
ジンとオルクの旅

カカカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジンとオルクの旅

【Nコード】

N7034Z

【作者名】

カカカ

【あらすじ】

この大陸「フィングラン」ではかつて神と魔龍による戦争が行われていた。

その戦争が終結した今、新たな時代を楽しんでいる人々に魔の手が迫る。

プロローグ 神と魔龍

今は昔の話、この大陸『フイングラン』では神と魔龍による戦いが、長きに渡って行われていました。

神はこの世界を作り出した創造主です。神はこの世界での自分の奴隷を作るために、様々な生き物を作り出しました。

人間、植物、海洋生物・・・そしてドラゴンです。そのドラゴンの中でも、特別に力が与えられたドラゴンが魔龍でした。

神に作られた生き物達は、神の奴隷となりながらもそれは幸せに暮らしていました。しかし、100年も前のこと。神が突然私たち人間をこの世から消そうとしたのです。人間が理由を聞いても、神は教えてはくれません。人間がいくら命乞いをして、神は聞き届けはくれません。

人間は最後の手段として、魔龍に神を倒すように頼んだのでした。すると、魔龍は人間たちの力になってくれたのでした。そうして、神と魔龍による戦争が始まったのです。

神は独りしか居ませんでした。その創造の力を使って魔龍たちを追いつめます。しかし、大勢いる魔龍達は戦意を鈍らせることなく奮闘しました。

そうして神と魔龍達の戦いは50年の間も続きました。

しかし、物語に終わりがあるように、この戦争にも終わりは訪れません。

魔龍達のほとんどは神にやられました。残ったのは魔龍達の中でも特に力が大きかった7体だけです。

そして、神と魔龍の最後の戦いはこの『フイングラン』で行われました。

追い詰められる魔龍達は、最後の力を振り絞り、神を封印することに成功しました。

自分の命を引き換えにした魔龍達の魂はこの世から離れていったの

です。魂の無くなった魔龍達の体はこの世に残っています。人間たちは感謝の意を込め、魔龍達を弔おうとしたとき魔龍達の体から淡い七色の閃光がほとばしり、魔龍達は上空に消えていきました。人間たちは不思議な現象を目の当たりにしながらも、こうして生き延びることに成功したのでした

「お終い。」

しわがれた老婆の声が、言い伝えの終わりを告げる。老婆の傍でそのお話を聞いていた少女は、目を輝かせる。

「お婆ちゃん、お婆ちゃん、もう一回そのお話をして！」

「ああ、いいよ。」

老婆は少女の頭を撫でながら、もう一度言い伝えの話始めた。

第1話 ジンとヒイリーとオルク

澄み切った青い大空に黒い龍が飛行していた。その黒い龍は真っ黒な鱗を太陽に照らすように飛んでいる。翼や目は漆黒だった。

その龍の上に二人の人影があった。

一人は真っ黒な髪を持ち、龍と同じような漆黒な瞳をする少年だった。年は15歳くらいで、顔は整っているイケメンだった。この少年の名は「ジン」。

もう一人は真っ白な髪をする少女。雪を溶かしたように白い髪がかなり印象的だ。人目を引くその少女はかなりの美少女だ。年は10歳くらい。この少女の名は「ヒイリー」。

そして、この黒い龍の名は「オルク」。

この二人と一体は旅をしている。縛られるものは何もない、自由で快適な旅だった。

ジンは退屈そうに、腕を上に乗っ直ぐ伸ばし欠伸をする。ヒイリーは暇を持て余すように少年に声をかける。

「ねージン、何か面白いことない？」

可愛らしく高いソプラノの声で尋ねてくるヒイリー。そんなヒイリーにジンは無愛想に答える。

「・・・そんなもんがあったら、俺は今頃退屈してねーよ」

ヒイリーは無愛想に返されたので、怒って顔を膨らませる。「そんなことは分かっているけどー」なんて言っている。

ジンはヒイリーを相手にしないで、龍の体から身を乗り出し地上の様子を見る。

何か面白いことがないか探すためだ。地上は見渡す限り緑しかない森だった。

少年は首を左右上下に振り、森の中をくまなく探す。

視線をオルクの進行方向に向けたとき、うつすらと砦が見えた。ジンは嬉しそうに声をあげる。

「おい！ヒイリー！国だ！新しい国を見つけたぞ！」

それを聞いたヒイリーは顔を輝かせる。トテトテ、と可愛らしい音を立てながら小走りをして、地上を見下ろす。ヒイリーは天使の様に輝かせている顔を、いつそう輝かせる。

「あー国だ！ジン！あそこ行こ！あそこ！」

ヒイリーは年齢に見合った、はしゃいだ声を出す。ジンも嬉しさで顔を微笑ましている。

「オルク！着陸だ、着陸！今からあの国の近くの森に着陸だ！」

「オオオーオオン」

ジンの命令に答えるように、オルクは鳴いた。オルクは次第に降下していき、近くの森に着陸する。

「よっと！」

ジンとヒイリーはオルクの背中から地面に飛び移る。ジンはオルクの方に向き直り、囁く様な声を出す。

「オルク、いつもみたいにごくここで留守番してるんだぞ。また大量に食料を買ってきてやるからな！」

「オオオン」

ジンとヒイリーはオルクに背を向け、新たに見つけた国へ向かう。

第2話 ジンと黒い魔法

ジンとヒイリーは新たに見つけた国の城門にたどり着いた。

城門の番人がジンとヒイリーに気づき近づいてくる。門番は人目を引く容姿のジンとヒイリーの姿を見て戸惑う。そして、主にヒイリーの事をチラチラと見ながら、入国検査をジンとヒイリーに受けさせた。

今の時代、旅をする者はほとんど居ないのであった。神と魔龍の戦争以後、人々はさらに平和な世界を得ることができたので、国を出ようと思うものなんて居なかったためだ。

厳しい検査を受け終わったジンとヒイリーが、入国を許可される。番人が簡単にこの国について説明をする。

「この国は『ギオス』といいます。農業が豊かないい国です」

自分でいい国なんていうなよ！ジンは心の中で思うが、もちろん口には出さない。

番人は説明を続ける。

「なお、この国では近頃無法者が増えておりますから、旅人さんもお気をつけください。まあ、警備隊がしっかりしているので、安全でしょうが」

「はい、分かりました」

ジンは最低限の言葉で返し、ヒイリーが門番に微笑みかける。門番は一瞬で顔を真っ赤にし、卒倒した。ジンはそれを見て呆れた様のため息をつく。

「ヒイリー、お前わざとやってないか？」

「えー全然わざとじゃないよー」

ヒイリーは「ほんとだよー」と付け足し一人で城門をくぐっていった。ジンは幸せそうな顔をしている門番を見て、どうしたものかとまたため息。

これが見つかれば後で大騒ぎになるのだが、どうしようもない。毎

度のことだ。ジンは仕方がなく門番を置き去りにして、城門をくぐる。

そこは、確かにいい国だった。馬や牛が人につながれ田畑を耕し、子供は母の手伝いをしている。小さい子供は近所で遊び、市場は活気に包まれていた。

ジンとヒイリーはしばしその光景を見とれる。

「いい国だな」

とジン。

「いい国だね」

とヒイリー。

二人は市場へと入り、適当に見て回ることにする。そこには、農業の国ならではの食材がたくさんあった。ジンはその食材を売っている店主に話しかける。

「おじさん、この肉はなんなの？」

ジンに聞かれて店主は、ジンの指差すものを見て得意げに答える。

「ああ、これか。これはこの国の名産品でなウィリカブ・ロースつてんだ。この国で生産されている小麦粉の中にチーズを入れてな、この国で飼育されてる豚の中に入れて焼くんだ。

最初は強火で一気にジュワァーと焼いて、それから低温でじっくり2時間焼く。そうしてできたのがこれさ。」

話を聞いていたらよだれが出てきそうだった。ジンは我慢していたが、後ろでズズツと口で何かをすすする音がする。ジンはその正体を知っているの、これを購入することにする。

ジンも食べたかったので一石二鳥だった。オルクのお土産にもしたつかったので、軽く10人前は購入する。

他にも色々美味しそうだったり、名産品だというものがあつたので買うことにする。オルクの分は100人前は買ったであろうところ、ジンとヒイリーは国を出るために、城門の前にいた。

ジンはその重い荷物を全部一人で担いでいた。しかも片手で楽々と。

周りの人々は奇異の目を向けてくる。あそんでいたこどもたちが

ヒイリーはその光景に感心したような、呆れているような声を出す。

「ジンの馬鹿力ってさーすごいよね。」

「馬鹿にすんなよ」

「別に馬鹿になんかしてないよー」

笑いあうジンとヒイリーの足が止まる。それは目の前にいかにも柄の悪そうな男たちが、行く手を阻んでいたからだ。ジンとヒイリーはそれに慣れているかのように、優しい対応をする。

「どちらさまでしょうか？お兄さんたち」

男たちの中から、一番体格が大きい人が前に出てジンの言葉に答える。

「おめえら旅人だろ？身包みを全部おいていってもらうぜ」

その男の言葉に反応して、周りの男たちが君の悪い声で笑い出す。

ジンはそんなお約束な言葉を聴き、退屈そうに欠伸をした。丁度周りには人はいなかった。唯一の人の門番は国の外で気絶している。

「よいしょ」

人が力を抜くときに出すような軽い掛け声で、ジンは1tはありそうな重い荷物を地面に降ろす。ズズウウン！・・・荷物は地響きを鳴らし、大地を一瞬振るわせる。ヒイリーは荷物の後ろに隠れるようにして回り込む。ジンの怪力を見ても、男たちは一向に怯む様子はない。

先ほどの体格のいい男が、ネタバレをする時のような口調でジンに話しかける。

「はっ！どうせそれも魔法の力なんだろ？恐れるになんとやらってな」

体格のいい男がそう言った瞬間、周りの男たちは先ほどよりも一層気味の悪い声で笑い始める。

この大陸では神と魔龍の戦いの後、『恵みの雨』と言われる光の雨が降った。その光の雨を受けたごく一部の人は魔法が使えるように

なったのだった。魔法という力を手に入れた人は、犯罪に手を染めるのだった。それを阻止するため、国は一般人の中から魔法を使えるものを警備隊とするのだった。なので、今魔法を使えるものは無法者と警備隊、そしてジンのような旅人ぐらいだった。

ジンは男たちの声を聞いて背中に虫唾が走る。

「・・・やめろ・・・」

「あっ？」

ジンが静かに呟いた言葉に男たちは笑いを止める。

しかし、また大声で笑い始める。今度こそジンは、聞こえるようにはつきりと言った。

「その下種みてーな笑い声をやめろって言っただよー!!!」

ビリビリ・・・空気が震撼した。男達はジンの怒声に笑い声を見たりとやめる。

一瞬、呆けていた男達だったがすぐに我に返りジンに向かって怒り始める。

「なんだと、この餓鬼！」 「ぶっ殺してやる!!」 「内蔵引き

ずり出されてーのかぁ!？」等等。

ジンは一度大きく息を吸い込む。

駄目だ!こんなことで取り乱していたら、ジンはまた大きく深呼吸。男たちの言葉など耳に入っていなかった。

ジンに無視をされた男たちは、怒りのボルテージが最高潮に達し、ジンに襲い掛かった。

「ウラアアー!!」

10人くらいいる男たちは一斉にジンめがけて襲い掛かる。するとピタッ!と男たちの足が止まった。

顔から汗を噴出している者もいれば、自然と足が止まっている者もあり、みんなが止まったから「じゃあ俺もー」で足を止めた者もいる。この男たちの違いは、一つ。ジンの魔力を感じることができたか否か。

ジンの体からは黒いオーラみたいなものが全体から噴出していたのだ。そのオーラが魔力。体から発せられる魔力は強さの証。その量が多いければ多いほど強いということになる。

ジンの体から発せられる魔力は、常人には底知れぬものを感じさせていた。ジンの魔力は渦を巻きジンの体の中へと収束していく。

「おら、どうした？こいよチンピラ」

男たちにジンは軽い挑発。男たちの単細胞ぶりは相変わらずでジンの挑発に簡単に乗る。まず、皆が足を止めたから「じゃあ俺もー」派がジンに飛び掛る。

ジンは黒い魔力を拳に纏わせ、それを男達にぶつける。

ドウッ！黒い魔力はジンの拳の威力を数倍にするだけでなく、男達に当たった瞬間爆発した。

「ぐわっ！」

数名の男たちが一斉にスタートラインにまで吹っ飛ばされた。吹っ飛ばされた男たちは魔法はおるか魔力を練ることすらできなかったのだろう。それができるものならば、少なからずジンの力を感じることができはずなのだから。ジンもそれはわかっており、一応手加減したのだが・・・吹っ飛ばされた男たちはやがて動かなくなつた。

死んだか・・・気絶か、どちらにしても悪いことしたなあ。ジンは心の中で「南無阿弥陀仏」と唱える。

ジンの拳に纏っていた魔力は、敵にぶつかるのと同時に消える。

吹っ飛ばされた仲間を見て、自然と足が止まった派が、ジンに背を向け一斉に逃げ出した。

「お、おい、お前ら！」

残ったのは汗を噴出した派の体格のいい男だけだった。

「くそっ！ふざけんなよ！テメーその反則みてーな魔法は何なんだよー！」

体格のいい男はジンに向かって、暴言を浴びせる。

ジンは右手を前に突き出し人差し指を立てる。そこに黒い魔力が集

中していく。

「これは、もう50年も前に消えた魔法・・・太古から存在する、ある龍の魔法・・・」

ジンが質問に答えると、体格のいい男は一瞬、ポケット、とした。そして、すぐに我に返り、ジンの魔法の正体に気づく。

「ま、まさか、その黒い魔力とこの破壊力・・・まさか、お前の魔法は・・・」

男は恐怖と絶望でろれつがうまく回らなかった。ジンは男に最後まで言わせない。

「黒点!!!」

ジンの指先に集められていた魔力が一気に噴出す。その流星にも似た黒い光線は、男の胸に風穴を開けた。一瞬で自分の胸に穴を開けられた男は、信じられないという顔で力尽きる。

全てが終わったのを見て、荷物の後ろに隠れていたヒイリーがジンに近づく。

「ジン、やりすぎだよー！あの男の人も死んじゃってるし。早くここ出ようーよ。すぐに警備隊が来るよ！」

「・・・ああ、わかってる」

ジンとヒイリーは素早く『ギオス』を出す。オルクの所にダッシュで行き、オルクと共に大空へと旅立った。

「オルク、これ食ってみろよ！あの国の名産品でめちゃうくちゃうまいらしいぜ」

オルクの頭につかっているジンは、『ギオス』で買った豚肉を差し出す。オルクは大きく口を開け、「食べさせて」とアピール。

ジンはオルクの口の中に肉を放り込む。オルクはそれを美味しそうに食べる。それを見ているジンも嬉しくなる。

ヒイリーやオルクが食べているのを見ていたジンは、自分も食べたくなり口に運ぶ。

「おお！確かにうまいなこのウイリカブ・ローズ」
オルクはジンとヒイリーを乗せ、真っ暗な夜空へ向かって飛行する。
自分たちには黒が似合うといわんばかりに・・・

第3話 魔龍の泉と雷の魔龍

晴れた大空に黒い模様ができている。それはオルクだ。そのオルクの背中にはジンとヒイリーが乗っている。二人は寄り添うように昼寝をしていた。

オルクは森の上を飛行している。その森の中間地点くらいを飛んでいると、ジンが突然目を覚ます。

ジンは自分がなぜ起きたか分からずに、首を左右に振って原因を掴もうとする。すると、森の辺りから不思議な魔力を感じ取った。

何だ？この俺を呼んでいるかのような魔力は・・・

ジンは肌でその魔力を感じ取り、オルクに降下するように命じる。オルクはすぐさま降下を始める。

森をしばらくぐるっと周り、魔力が流れている正確な場所を掴む。魔力が流れている場所をジンが感じ取り、その場所へと向かう。

そこは森の丁度中心にあるような場所だった。周りを木々が囲み、泉がある。その外れに家が一軒建っていた。

ジンとヒイリーを連れたオルクはその家へと向かうことにする。その家から少しはなれたところにオルクは着陸し、ジンとヒイリーを降ろした。ジンはヒイリーをたたき起こす。

何がなんだか分からないヒイリーに、ジンは状況を掻い摘んで説明し、今からあの家へと向かうことを説明する。

ギギイイイ・・・軋んだ音を立て、見るからに古い家の扉が開く。かなり古いものらしく、扉を開けると家全体が軋んだ音を立てた。ジンとヒイリーはそつと家の中に入り、家の中の様子を見る。家は一室しかない狭いもので、扉を開けるとそこは広間になっていた。素朴な部屋で、部屋にはベットと囲炉裏しかなかった。

その囲炉裏にはスープが作られていて、囲炉裏の前には寿命があと何年かというようなお婆ちゃんがいた。

お婆ちゃんが、ジンとヒイリーに向かって話しかける。

「待っておったぞ・・・『黒のドラゴンマスター』よ」

「なにっ！」

このお婆ちゃんが発した言葉『ドラゴンマスター』、ジンはその言葉に過敏に反応し、お婆あちゃんに向かって怒鳴る。

「その婆！どこでそれを知った！どうして俺が『黒のドラゴンマスター』だと分かった！」

「・・・今説明してやるから、そこに座りなさい」

お婆ちゃんは、どこからか座布団を取り出し、ジンとヒイリーに座るように薦める。

ジンは納得しないようだ。ここまでの怒りを覚えるジンはヒイリーはあのこと以来だった。そんなジンを見ているヒイリーは、ジンを説得する。

「ジン、あのお婆ちゃんの言う事を聞こうよ。私あの人が何か大切なことを知っているような気がするの」

口から出たでまかせだったが、ヒイリーには何かそんな気がしていた。ジンもヒイリーの言ったことが、完全な嘘ではないと思い、ヒイリーと一緒に囲炉裏の前に座る。

「私の名前はミト。ミト婆とお呼び」

「婆さん・・・いやミト婆さつきはすまなかった。つい熱くなった」
ジンはミト婆に先ほどのことを素直に謝った。ミト婆はそんなことは気にも留めていない様子だった。ジンとヒイリーはミト婆に自己紹介をし、ジンは本題を切り出す。

「ミト婆・・・『ドラゴンマスター』どこでその言葉を知ったんだ？それになぜ俺が「黒のドラゴンマスター」だと分かったんだ？」

「・・・少し昔話をしようかの・・・」

昔々、人間を賭けた神と魔龍の戦い、あれはごく一部の人間から『神魔対戦』と呼ばれた。生き残った七体の魔龍は、最後の力を振り絞り神をある地へと封印した。自分の命と引き換えに。

人間たちは、魔龍は滅んだものと思っていたがそうではなかった。魔龍には子供がいた。まだ生まれてもいなかったが、確かに魔龍の子供はいた。その魔龍の子供たちは、自分と同時期に生まれてくる人間の子供たちを自らの相棒パートナーとすることにしたそう。そうでなければ、龍の子供はうまく力を使うことができなかったそう。そうして龍のパートナーとなった。その人間の子供たちはこう呼ばれた。龍を統べるもの・・・『ドラゴンマスター』と。その人間の子供たちは、龍の力を受け継ぎ龍の力を使えるようになった。

「お終い」

ミト婆が物語の終わりを告げる。ジンとヒイリーはそれを黙って聞いていた。ジンとしては、自分自身のことだからいまさら驚かないヒイリーもジンから聞かされていたので驚くことはない。

「ミト婆、確かにその本当のことだ。事実俺がそうだ。だが、なぜあんたがその話を知っているんだ」

「・・・物語にも出てきた「ごく一部の人間」それはある一族のことじゃ。その一族は神ではなく魔龍に使っていた人々。わしはその一族の唯一の生き残りじゃ」

「魔龍に使えていた人々！？そんな話は聞いた事がないぞ!？」

「・・・当たり前じゃ。その一族は魔龍にも存在を知られてはいなかった。存在が知られれば、神は怒りこの世界で天変地異が起きていただろうからな」

ヒイリーは全く話についていけなかった。知っていることはジンから聞かされた、最低限の話だけだからだ。ジンはさっきの質問をもう一度する。

「ミト婆、さっきの質問だ。どうして俺が黒のドラゴンマスターだと分かったんだ？」

「・・・簡単なことじゃ」

ミト婆はジンやヒイリーの後ろを指差す。ジンは振り返るがそこに

は腐りかけの扉しかなかった。

「この家の外に泉があつたじやろう？」

「ああ」

「その泉は『龍血の泉』という」

「龍血の泉？」

「そう、そこにはわしの先祖が魔龍の血をその泉につけたことが名前の由来じゃ。以来その泉では魔龍が近くを通ると、その魔龍の事をわしらに知らせてくれたんじゃ」

ジンはミト婆のほうへと振り返る。

「ミト婆・・・」

そこにミト婆の姿はなかった。

「ついて来い、わしがやり方を見せよう」

ジンの後ろからミト婆の声がした。ジンが再度振り向くとそこにミト婆がいた。

馬鹿な、この一瞬で移動したのか！？

ジンは驚愕の表情をする。だが、今は驚いている場合ではなかった。ミト婆の後に続き、ジンとヒイリーは家を出てその外にある泉へ向かう。その泉は中央部が黒く変化していた。ミト婆が説明してくれる。

「この泉は魔龍を色で示してくれる。お主の様な黒の魔流は黒いといった風にな」

「なるほど」

ヒイリーが泉を見て、何かに気づく。

「ねえミト婆、何でこの黒い模様は変化してるの？」

「いいところに気づいたねえ、おじょうちゃん」

ミト婆がヒイリーを見る。ミト婆はヒイリーを見て顔を曇らせた。ヒイリーには聞こえないような小声でジンに聞いてくる。

「お主、この子をどこから連れてきたのじゃ？」

「えっ？」

ジンはミト婆が何を言っているのか一瞬分からなかった。その後ヒ

イリーの様子を見る。ヒイリーはジンとミト婆の顔を交互に不思議そうに見つめている。ジンはヒイリーのことを説明する。

「ヒイリーは雪の国『ホースノール』で出会ったんだ。この子はその国では生活ができないようになったんで俺が連れてきたんだ」
ヒイリーの事を聞いたミト婆は「やはりそうか」などつつばやいている。

ジンには何がなんだか分からなかった。ミト婆はそこで話を区切るように、ヒイリーのことを置き、ヒイリーの質問に答える。

「この泉の模様が表しているのはその魔流との距離じゃ。今この黒い模様が変化しているということは、黒の魔龍が移動しているということじゃ」

ミト婆の説明を聞いたジンは黒い模様を見つめる。黒い模様は大きくなったり、小さくなったりしている。どうやらオルク行ったり来たりしている様だった。

ミト婆は泉からジンのほうへ向く。

「わしの頼みを聞いてくれんか」

「何ですか？」

「黒の魔龍をここへ呼んでくれんか」

「えっ」

どうしようかな、あまり人に見せるものじゃないけどミト婆は魔龍について知っていることが多そうだし・・・

「いいですよ」

ジンは人差し指と親指でわっかを作り、それを口で咥える。

ピイイイイイイイイ・・・ジンから鳴らされる口笛の音は、この森全体に聞こえるような大きなものだった。
しばらくすると・・・

「きたっ！」

ジン達に照り付ける太陽の光を遮る様に、空から黒の魔流オルクが降りてくる。

「おお、これが・・・黒の魔龍・・・」

オルクは、ばさっ！ばさっ！と翼を羽ばたかせ、ゆっくりと地面に降り立つ。ミト婆が喜びにあふれた声を上げる。

ミト婆はオルクにゆっくりと近づき、ジンに名前を聞いてきた。ジンは「オルクだ」と答えてやる。

近づいてくるミト婆を、オルクは最初不思議な目で見ていた。だが、その後オルクはミト婆に鼻先を近づけた。ジンはその光景を見て一瞬驚く。だが、それもそうかと納得する。

・
魔龍は人のために神と戦ってくれた心優しき生き物だ。ミト婆はそんな魔龍に陰で使えた一族の末裔。オルクが懐くのも無理ないか・

ジンは心の中で思い、今日の前にある光景を優しく見守っている。

ミト婆は差し出されたオルクの鼻先を優しく撫で、愛しそうに自分の頬を擦りつける。

「あっ！！」

ジンの後ろでヒイリーが驚いたような声を出した。ジンはヒイリーに振り返る。

「どうしたんだ？」

「これ見てー」

ヒイリーの指は泉の中央に向いていた。今オルクが泉に最大限まで近づいているので泉のほとんどは黒に染まっていた。だがその中で黒ではない部分があった。その色は泉の中央から少しずつ広がっていていた。

それは、黒と黄色を混ぜたような色だった。・・・黄色？

「ミト婆、これは・・・！」

ジンがミト婆にどういうことか説明を求めようと振り返ると、そこにはもうミト婆がいた。

また一瞬で・・・

ミト婆は池の混乱している色を燦しがけに見る。

「これは・・・珍しいこともあるもんじゃ」

「どういうことだ？」

「これはこの泉に別の魔龍が近づいてきている証拠じゃ」
「なっ！」

ジンは言葉を失った。今までの長い旅の中でジンはまだ別のドラゴンマスターと魔龍に出会ったことがなかったのだから。泉に新しく出た黄色はどんどん広がっていく。

「その魔龍はどんな奴だ？」

黄色の色は、黒い色と同じくらいにまで大きくなる。

「この黄色の色は・・・雷の魔龍じゃ！！」

「か、雷の魔龍！？」

ドンッ！！！！

大地が震える。その物体が飛来した部分は土が捲れ上がり、少し焼け焦げたような跡がある。

ジンは音がしたほうを振り向く。

そこには魔龍がいた。黄色の鱗をまとい、体からは電光が迸っている。こいつが雷の魔龍だろう。

魔龍の背中から一人の少年が姿を現す。

第4話 黒のドラゴンマスターと雷のドラゴンマスター

雷の魔龍から少年が降り立つ。

「黒のドラゴンマスターはお前だな」

黄色の髪をした少年はジンを指差す。

「殺ろうぜ」

黄色の少年が突然がジンに向かってダツシュ。拳を振り上げジンに殴りかかる。その拳には黄色い魔力を纏っていた。

ドン！ ジンの立っていた場所から地面が盛り上がった。

「・・・・・・・・いいね」

黄色の髪を持つ少年が嬉しそうに言う。

ジンは殺られてはいなかった。少年の黄色い魔力を纏った拳を、ジンは黒い魔力を纏わせた拳で相殺していた。

少年は地面をタンツと蹴りジンから距離をとる。

「私の言葉に答えよ。我が名はライチ。魔龍の名はジルバーン、雷の魔龍。私の望む物は「雷龍剣」（らいりゅうけん）！」

少年が呪文のようなものを唱えると、その手に剣が出現した。少年はその剣を肩に担ぎ、切っ先をジンに向ける。

剣には黄色い魔力が纏っており、バチバチと音を立て放電していた。

「くらえっ！雷刃斬！！」

少年は剣をジンに向かって振り下ろす。剣にたまっていた魔力が爆発するように開放される。開放された魔力は剣の形を保ったまま、一直線にジンへと向かっていく。

「！！！！」

ドウ！！ 先ほどの攻撃より2倍以上の爆音が鳴る。

「ぐはっ！」

ジンは真後ろへと吹っ飛ぶ。吹っ飛ばされたジンはそのまま木へと激突する。体の衝撃でジンは口から吐血する。

「ジン！！」

ヒイリーがジンの元へと駆け寄る。

黄色い髪 of 少年は剣を虚空へと誘わせ、つまらなそうに呟く。

「ジルバーン、ほんとにあいつが最強のドラゴンマスターなのか？
弱すぎだぜ」

雷の龍は少年の質問に答える。

「あの少年はおそらく何も知らないのだろう。力の使い方や、これからのこと」

「ふんっ！まあ、あいつは戦闘の才能はありそうだな。龍の記憶がないくせに攻撃に魔力を纏わせていたし」

「相変わらず戦闘狂じゃのう、ライチよ」

少年は声のしたほうを振り向く。そこにはミト婆がいた。

「久しぶりだなミト婆。俺的にはあんたと戦えると嬉しいんだけどな」

少年は期待するように言う。だがミト婆はそんな少年の期待を裏切るように言う。

「わしはそんな気はないよ。それよりジンに手を出してんじゃないよ。ドラゴンマスターの手合わせは最低限という決まりを忘れたのかい！」

「大丈夫だよミト婆。こんなことで死ぬぐらいの奴なら、近い未来に起こる「神魔対戦」で役に立たないだろうからな」

「何が大丈夫なのだ？ ライチよ」

雷の龍が少年に突っ込む。

「ジン！ジン！大丈夫？」

ヒイリーが必死に呼びかける。ジンはその呼びかけに応える様に体を起こす。

「あ、ああ。」

ジンが体を起こそうとすると、そこに少年がいた。

少年はジンに向かって手を差し伸べる。ジンはその手を素直に受け取り、痛む体を何とか起こす。奇跡的に怪我はなかった。

「やるじゃねーか、黒のドラゴンマスター」

「そっちこそ、雷のドラゴンマスター」

少年とジンが握る手を離さずに互いを褒め合う。

何でこの二人さっきまで殺しあっていたのに、こんなに仲いいの？
ヒイリーに素朴な疑問が心にできた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7034z/>

ジンとオルクの旅

2011年12月26日22時54分発行